

.....
 卷 頭 言

教 育 と 医 療

木 田 宏*

教師が生徒を教え、親が子を育てるとい
 うのが、教育の基本的な型であり、医師が
 患者を治療するというのが、医療の基本
 型である。一方が主導的な立場に立ち、他
 方が受動的な立場に立って、その間に、相
 互作用が行われる、という点で、教育と医
 療は、極めて類似した人間関係に立ってい
 るといえる。

主導的な立場に立つゆえに、共に先生と
 呼ばれる教師と医師、その手腕、力量によ
 って、教育や医療の効果に、顕著な差異が生
 ずることは、言うまでもない。医師が患者
 に対して、生殺与奪の立場に立ち、教師と
 の出会いによって、生徒の生涯が左右され
 ることのあるのも、事実である。

しかしまた、病気が治るのは、基本的
 には、患者自身の持つ治癒力、生き運まで含
 めた生きる力によるのであって、医師の力
 によるものではないという一面も否定でき
 ない。教育の成果も、各自の学習努力によ
 るのであって、教師は単にその動機付けを
 行い得るに過ぎないとも言われる。子供は
 親の思いどおりには育たず、ダメな親、悪
 い環境もまた子供を育ててくれるというの
 も、一面の現実である。

教育も医療も、その効果は、基本的には、

受動的な立場にある、受手の側の受け止め
 方次第であるということになる。受動的な
 生徒や患者が主体的な役割を持つというの
 も、結局、人間の生存能力の基本にかかわ
 る点において、教育も医療も同じ類の営み
 であるからではないであろうか。

同じと言えば、教育も医療も、本質的に
 は一個の人間の生存の問題でありながら、
 社会的な問題、社会的な運命共同体の問題、
 それゆえにまた、社会制度の問題として、
 その対応がとられなければならない点も、
 同様である。流行する病気の対策、住民の
 教育水準の向上は、古くから為政者の重要
 な政策課題であった。今日、その課題は、
 ますます重要性を増すばかりである。

教育制度は拡大し、医療制度の整備も進
 んで、教育費、医療費は高騰する。当然の
 ことながら、教育や医療に対する社会保障
 や環境改善の施策も進められることにな
 る。

ところで今日、教育荒廃と言われる諸現
 象をめぐって、改革論議が活発である。そ
 れは制度として対応すべきことか、環境改
 善を要するのか、それとも、基本に立ち返
 って、個別の対応にゆだねることか。医療、
 医療制度の諸問題と対比するとき、そこに
 論点の整理が必要ではないかと考えるので
 ある。 ~~教育と医療~~

* きだ・ひろし (1922年生)
 日本学術振興会理事長。